

大陸(中支)

工兵隊 縁の下の苦勞

愛媛県 松崎 信行

大正七(一九一八)年十一月三日、当時の愛媛県伊予郡という所で生まれました。家は農業でしたが、父は商業をしており、いわゆる半農半商の三男でした。商業をするため、私が小学校五年生の時、一家は県庁所在地である松山市へ移住することになりました。

私は、高等小学校を卒業し、松山市の鑄造所へ住み込みで修業をしていました。昭和十(一九三五)年十八歳の時に、母の妹の家が鑄物工場を経営しているの

で、一人前の鑄物師になるため叔母の家で修業をするようになりました。

昭和十三年の徴兵検査では第二乙種でしたが、当時は支那事変勃発の翌年であり、戦線を拡大中であったためか、第一乙種に編入されたのです。

そのため、昭和十四年五月三日、善通寺の第十一師団、工兵第十一連隊留守隊第二中隊へ召集され入隊したのです。当時、第十一師団の本隊は中支において戦っていました。私がなぜ工兵なのかは、仕事が鑄物工であったためなのかとは思いましたが、工兵の初年兵教育というのは大変厳しいものでした。

まず、土工でした。塹壕を掘り、戦車壕を掘る。次は、リヤカーを改造した偽装戦車に対し、アンパン型地雷をキャタピラーの下へ入れる。その後は、善通寺

の練兵場で本物の戦車に対し攻撃をするのですが、リヤカーの偽装戦車とは違って、急にカーブをしてさつとかわされる。これでは駄目だと、爆雷の両端を紐で引つ張り、キャタピラーを破壊する演習をしました。

工兵というと、上海事変の肉弾三勇士を思い出すでしょうが、火薬を扱うのも工兵の任務でした。本物の戦車となると迫力はあり、いざそばまで進んで来ると圧倒されるようでした。そのキャタピラーの下へ飛び込むようなものですから、演習といえども命がけでした。

次は漕舟でした。徳島の吉野川まで行き、現地で、鉄舟や折畳み舟艇を漕ぎます。町の池でボートを漕ぐようなわけにはいきません。吉野川では漕舟ばかりではなく、杭を打ち込んで橋を造るのです。

中でも厳しかったのは、夜中に非常呼集で起こされ、舟を川へ浮かべ敵前上陸の演習でした。鉄舟は重いので八人で棒を入れて担ぐのだから体力が要るのです。工兵の仲間は土工が多いが、私は、土より重い鉄の鋳物をやっていたから助かりました。

七月十五日、一期の検閲が終わるまでは強行訓練の連続でしたが、戦車攻撃が専門でした。私らは、第一師団後備工兵第二中隊に転属となりました。普通寺には歩兵はもちろんです。砲兵も工兵も輜重しちゆうもあつたが、騎兵は戦車隊（搜索）となりました。

九月、香川県の坂出港を出帆し上海へ上陸、同日揚子江コウチンの第十一師団後備工兵第二中隊に編入されたのです。呉淞ワソンから揚行鎮までは十里くらいでしたが、トラックで行き、来代部隊（中隊）姫路隊（小隊）へ入隊したのです。

昭和十四年十月一日、宝山県全家宅火薬庫及び揚行鎮付近、玉濱の兵営警備勤務を第二・第四小隊で行ったのですが、当時、広い場所に飛行場を作っていました。

我々は、道路を造ったり橋を架けたりしていました。機械は使ったが、大部分は金を支払って苦力クワリを使いました。海軍や憲兵隊もやかましく、労働させるには賃金を払う。一日の工賃がたしか七〇銭（一円の十分の七であるが、労働賃金としては良い方でした）。

その当時は、軍票（日本軍の金）の価値は高く、中国の紙幣は値が下がっていました。もし、日本軍に不正があると憲兵がやって来ます。従って、日本軍は占領地の住民や労働者を無償や、安く使ったことはありませんでした。

翌年、昭和十五年四月、蕪湖から、春期皖南作戦に参加しました。第一期には北山攻撃です。はげ山でトーチカから、どんどん撃って来る。敵の壕は深く掘って土を上へ上げているから、攻撃しても壕を渡るのに大変で、攻略しにくい陣地でした。

この時は、野砲に配属になりましたが、馬を大切にするため、「兵隊は一銭五厘、馬は二〇〇円」と言っていたし、「弾は前ばかりではないぞ、後ろからも来るぞ！」などとおどかしたので、野砲の将校は、配属されている我々に対し、あまりやかましく言わなくなりました。我々が逆におどかしたのは、自分の身を守るために言ったのですが、効果があったわけです。

この戦いで、我軍の犠牲は少なくなかったが、敵は

大打撃を受けたのです。我軍は清弋江と南陵城を占領し、第二期戦では青陽県城攻略戦闘に参加しましたが、敵が逃げたので楽に攻略しました。

昭和十六年一月、曹家渡、真茹鎮門の道路を造り、橋梁を構築しました。このため、上海からの一直線の道路が完成したので、今でもその道路ができたことを喜ばれています。

一月十日、部隊の編成替えがなされ、我々は復員完結し上海出發。一月十六日、宇品港上陸。十七日、工兵第五十五連隊に編入。同二十三日、召集解除。その後、鋳物工をし、呉の海軍工廠の仕事をしていました。

このため召集が遅れていましたが、十月四日、臨時召集令が来ました。私は周囲の人々も出征しているのでも、「早く召集してくれば良いが」と言っていたのですが、やっと来たわけです。そして、工兵第五十五連隊補充隊第三中隊（越智隊）に入隊しました。

昭和十七年八月、捕虜を連れて高松港で貨物の積み

降ろしの作業の監督をしていました。米軍の中に、日本の新潟に八年も居たというニコラス軍曹がいました。なにしろ、日本語がペラペラに喋れる人で、友達のようになりました。捕虜の食糧が少ないのでパンを分けてやり感謝されました。向こうの人は、几帳面で、規定の時間になると、荷物を持っていても荷を置いて帰ってしまう。そのため、それを日本人の使役に片付けさせねばなりません。しかし、我々との人間関係は良かったです。

日本では日露戦争の時、ロシアの捕虜の待遇を良くしたといい、今でも、ロシア人捕虜の墓地が残されています。そうこうしているうち、召集解除となりました。

三度目の召集は、昭和二十年四月三日にあり、工兵第五十五連隊補充隊に入り、第三中隊に配属され、初年兵の教育係をしていました。未教育の年配の初年兵もおり、内地でも段々と根こそぎ召集の様相がうかがわれていたようです。

そして、内地空襲も段々と激しくなりつつある六月十六日、大阪城内にあった、中部軍管区司令部に勤務となり、八月十二日、広島に原爆が投下されました。そのため、救護物資を持っていったのですが、その時持っていた新聞は憲兵に没収されてしまいました。その新聞とは、中国が発行したもので、事変中、日本軍が中国軍にやられた如く書かれたもので、その時の事実は日本軍に中国軍が損害を受けていた時のものでした。

八月十五日、終戦となり、大阪の司令部に帰り、九月十八日、召集解除、復員となったのです。

当時を思い出すといろいろなことが思い出されますが、中国での戦闘では、我々の戦友がだいぶ死にました。松山市に、同年兵が十数人いたのですが、今は随分死んでしまっています。

軍隊で今でも思い出される印象に残ることは「工兵とは、縁の下の兵種である」ということです。

歩兵などが渡河する時、工兵はクリークの中に入って梯子を背にして歩兵を渡らす。すると自分の体が

段々沈んでいく。特に、弾丸が飛んでくる時など、自分達工兵が人間の橋杭であり橋桁になるので逃げるわけにはいかなかった。我々の上を渡っていく歩兵は良いが、弾が飛んできても、避けることも、逃げることもできないのが我々工兵なのだから、一番死んでいるのは工兵でした。

火焰放射器は工兵が操作するのですが、火焰の長さは三〇メートルと言うが、二八メートル辺りでは焰の勢いは弱くなるのです。我々を実戦には持つていったが、上海では使いませんでした。

肉弾三勇士の時は、火薬に防火設備がなく、自分で火を付けて三人は走って行って鉄條網を破壊した。

舟艇の演習の時は急流の所を上られます。吉野川は日本三急流の一つとも言われておりますが、漕ぎ上るので手に豆ができるので、衛生兵はちょっと切つてヨードチンキを流し込むので痛くてかきません。足に豆ができて、水虫ができてヨードチンキでした。軍隊では、兵隊が痛くても治療が早いからヨーチンを使うのです。縫い針に糸を付け、糸にヨーチン

浸して患部を通す。痛みが患部の液はなくなり、表皮が破れずに治療ができるので、少々の痛みは我慢ということになりました。

工兵の道具では円匙（シャベル）、十字鋏があるが、作業後、少しでも泥が付いたら大変です。ピンタを食らうのは当然、大切な工具だからです。円匙も十字鋏も、それぞれ所定の場所へ、円匙は背の裏にびったりと付け、工兵の十字鋏は大きいので、洗って班内の自分の所に置いておくのです。

工兵は工具を持つての行軍です。善通寺から吉野川へは夜行軍で、池田の山の下の兵舎へ行く、琴平山の脇を通つて吉野川へ出て、猪鼻峠を登るのですが、これが直線で登るのです。しかも完全軍装だから、円匙、十字鋏も歩兵のより大きく、そのうえ、三八式の銃も持つて行くのですから大苦勞です。

次に、工兵の編成・種数についてちょっと説明をしてみます。

甲・乙は野戦工兵で馬はないから、全部担がなければならぬ。

丙・丁は舟艇、戊は鉄道（線路）と思う。車両は配属輜重がある。

工兵は土工が多いので、以前の職業から入れ墨をした者が多い。その者には、「親からもらった大事な体に彫り物をするとは何事ぞ」と叩かれます。しかし軍隊で教育されますと、まじめ人間となって帰って行きました。

爆薬は野戦工兵です。対戦車の爆雷は支那事变当初は、アンパン型でしたが、その後は亀の子型の破甲爆雷が使われていました。亀の足型の所が磁石であり、戦車の鉄板に密着し爆発、戦車の中部まで破壊させます。

その後、対戦車用の爆雷は次々と新しい考案がなされていくと聞いています。

初陣は常德殲滅作戦

岐阜県 道下 政太郎

私は、二十八歳の補充兵として、第三師団輜重兵第三連隊に召集され、中支の本隊に入隊しておりました。昭和十九（一九四四）年秋近いころ「極秘だが、十月十三日ころには〇〇方面に向かって作戦行動が開始されるらしい」と、噂から噂が流れて来た。そして、各班とも次第に作戦準備に多忙になってきた。

作戦が始まれば、輜重兵は特に忙しくなる。山岳地帯は駄馬により任務の輸送となるので、駄馬の調教をしなければならぬ。日本馬は少なく、将校の乗馬である。その他、人事及び功績の駄馬くらい、他はほとんど蒙古馬及び中国馬である。比較的使い難い。中でも我が分隊の「北京号」等は嘔む、ける、荷を積載すれば荷が落ちるまで跳ね回る。駄馬輸送の御兵も決して楽ではない。